



## 究極のフェイクをめざす

仲野昌晴

フェイクが本物より本物らしく見えることがあります。

たとえば林檎の彫刻が本物のように見えたり、造花から香りが漂ってきそうに感じる瞬間。

ならば形状を持たせず質感だけでどこまで本物らしく見せることができるだろうか。

印刷で究極のフェイクに挑戦しました。

## ABOUT TRIAL

トライアルについて

### ●制作の背景

仕事から、ポスターをつくる時は必ず商品やキャンペーンといったテーマがあります。僕の場合は飲料系の担当なので、液体やグラスなどを用いた印刷物でどれだけシズル感を出せるか、それをどれだけ伝えられるかがポイントになります。

ところで、一般的なポスターを消費者が目にした場合、数秒で全てを判断してしまうと言われてます。このほんの一瞬の間に伝えたいことを的確に伝えるとなると、いかに確実に伝えるかが勝負で、そうすると「雑味」となるような不確かな要素は殺してしまうことが多いのです。

もちろん対象物となる飲料の性格上、できるだけ純粹に表現したほうがシズル感も増す、ということもあります。しかし、たとえば自然物などがモチーフなら、偶然性や生育途中での傷なども「本物らしさ」には欠かせない要素です。いつかどこかで自分を抑えつげずに思いきり「本物らしさ」の表現をしてみたいな、と思っていたら、このトライアルの話がきました。プリンティングディレクターのサポートもあるというので、この機会に挑戦してみようと思い立ちました。

### ●制作のコンセプト

究極のフェイクを印刷でつくる、これが今回のテーマです。モチーフは日ごろ見慣れているものから選んでみました。誰が見ても「葉っぱだね」「髪の毛だ」と認識できるものをモチーフにしたのは、すでに共通言語が存在しているものはごまかしようがないからです。普段見慣れていないものだと、理解しやすい反面ごまかしやすくなると思ったので、皆がよく知っているものを選んでみました。素材は、それぞれのモチーフのいちばん「らしさ」が出ているところを高解像度カメラ



で接写したものを。グッと被写体に寄って撮影し、ものを認識する際に手掛かりとなる輪郭を取り去り、質感だけで表現することを狙いました。

さらに、表現方法では印刷と紙の扱いを逆に行ってみました。質感と色を紙に求め、印刷は主として明度の違いを出すために使い、若干の差し色以外には色の表現を抑制しています。通常なら4色で色も質感も表わすところを、それを取り去ることで、紙の質感と印刷にお互いの良さを引き出させたいと考えました。もう一つの目的は、触感まで含めてモチーフを表現するためです。触ったときのザラツキやふんわり感など、視覚以外の五感にも訴えかけるような、単なる印刷ではできない質感表現を紙に担わせています。もちろん、印刷物は白い紙に4色で刷るほうが絶対にきれいに仕上がると思いますが、あえて表情のある紙を使うことで、トライアルに不確定要素を盛り込んでみました。

最後にデザイン的な要素として皆の概念のなかに存在する「形」を記号化し、そのものを象徴する色ツヤと用紙の地色の差異を比較対照できるようにしました。「葉」は葉脈、「肉」は脂身など、そのものを表す重要なファクターをデザイン化しています。

—— 仲野昌晴

# TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

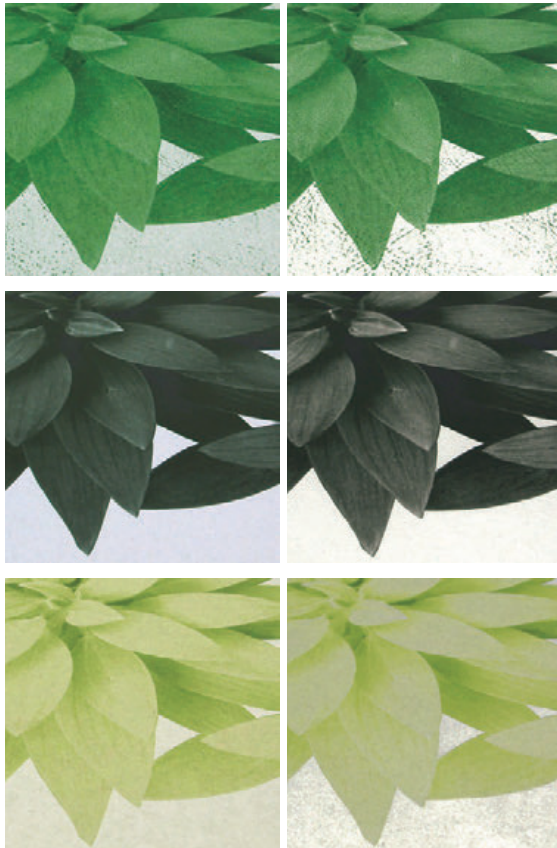
# 1

## 紙地を生かした質感表現

「紙地と印刷で出せる質感表現の幅を探ってみたいと思います。そこで、最初のトライアルでは植物の葉をモチーフに選んでみました。誰でもよく知っているありふれたものですが、それだけに見る人をごまかせない難しい素材だと思います。しかも美しく再現するのは意外と難しいんですね。最初のステップですから、思い切ってハードルを高く設定しました」

### 紙地を生かして葉を表現する

紙地の色と印刷の掛け合わせで葉のイメージをよりよく表現できるもの考えた。用紙はあえて実物の色にこだわらずに「もっとも葉らしくなりそうなもの」を選択。インキはオベークホワイト系で葉のライト部、特色緑でシャドウ部、そしてシャドウ部よりも濃い特色でシメるという設計で3種類を選択。特色緑に関しては、濃度とともに鮮やかさを出すために蛍光インキを混入した。また、葉が無い背景部分は、ライト部用インキと同じものをベタで刷り、紙地を隠蔽した。



刷り順：オベークホワイト→特色緑1→特色緑2  
ライト部のインキは、オベークホワイトの他に、パールメジウムを混ぜたものや銀も試した

用紙は上から、「ニューウェブロンカラー / 緑」「ぐびき / 新橋」「ファーストヴィンテージ / アップルグリーン」。左列が、ライト部にオベークホワイトを使用したもの。右列が、銀を使用したもの

# 2

## 葉のディテールをつくりこむ

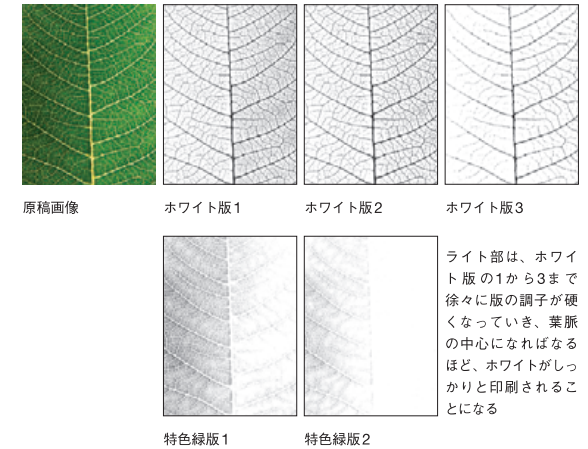
「今回は前回に引き続き植物の葉を掘り下げます。質感と色のベースを色紙の紙地にして、印刷で影と光を補ってつくりあげていきます。素材は、ポインセチアの葉です。葉脈をはっきりと見ることができ、人が持つ概念的な葉の形だと思えたからです。この葉を、輪郭を認識できないところまで拡大して原稿にしました。さて、形の枠を取り払った状態でどれだけ“そのもの”に近づけるでしょうか」

### 葉のディテールをつくりこむ

前回よりもディテールをつくりこむため、ライト部は3種類のホワイト版を作成。シャドウ部は前回と同様に2版、特色緑を用紙の色味にあわせて調肉した。用紙は前回のトライアルを参考に、葉の質感と色に近いものに絞り込んだ。その結果、ざらっとした質感をした明るい緑の用紙と、やわらかな風合いで濃緑色の用紙の計2種を選択。インキはライト部にはオベークホワイトを、シャドウ部には紙地との掛け合わせを考慮した特色を使用した。



刷り順：オベークホワイト (3版) → 特色緑1 → 特色緑2



原稿画像

ホワイト版1

ホワイト版2

ホワイト版3

特色緑版1

特色緑版2

ライト部は、ホワイト版の1から3まで徐々に版の調子が硬くなっていき、葉脈の中心になればなるほど、ホワイトがしっかりと印刷されることになる



用紙：ニューウェブロンカラー / 緑

用紙：GA ボード / ダークグリーン

# TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

アートディレクター 仲野昌晴 × プリンティングディレクター 田中一也

# 3

## 紙地と陰影で五つの質感を表現する

「最終的に選んだモチーフは、葉、パン、肉、魚、髪。誰もがよく知っている身近なものばかりです。極力少ない色数で、紙地と陰影とニスでどこまで質感に近づけるかにトライします。パンは白くてふわふわした感じを、肉は脂の乗ったギラギラとした生々しさを狙います。魚はギラリとした輝きとヌメリだけでなく生臭さまでを、髪はしっとりとした艶やかさとともに髪の毛の重みまで表現できればと思います。葉はこれまでのトライアルで得たものを生かしつつ、植物らしいざらつきをポイントに考えました」

### パンのふわふわ

原稿

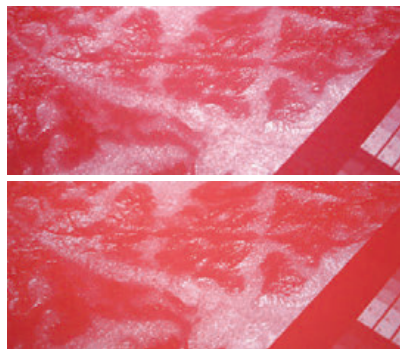
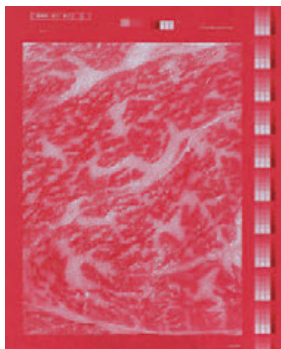
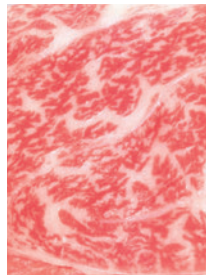


刷り順：オペークホワイト(2版)→特色淡茶→特色濃茶  
ライト部を構成するホワイト版、シャドウ部を構成する特色版ともに、中間部の調子まで表現するやわらかな版と、調子を補足するコントラストの強い版の2種を組み合わせている。ホワイト版は発色をよくするためにそれぞれの版で2度刷りした

用紙：上：GAコットン/白茶、下：ハーフエア/コルク  
「GAコットン」は白い繊維が走っており、見る角度によって繊維が光り不思議な立体感が生まれた。「ハーフエア」はふわりとした用紙の質感がパンのイメージと重なった

### 肉の生々しさ

原稿

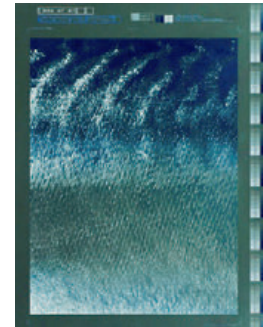


オペークホワイト(3版)→特色赤→グロスメジウム  
ライト部を構成するホワイト版は階調を変えて3種類を作成した

用紙：上：TS-3/N-52、下：ハンマートーンGA/朱  
「TS-3」ではグロスメジウムにより脂のギラギラした質感が出た

### 魚の輝き

原稿

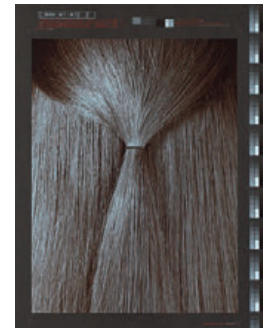


刷り順：オペークホワイト(2版)→特色青1→特色青2→グロスメジウム

用紙：上：クニメタル/グリーンシルバー、下：エルマーメイド/ゴールドシアン

### 髪の艶やかさ

原稿



刷り順：オペークホワイト(2版)→特色オレンジ→特色茶→グロスメジウム

用紙：上：堅彩紙/黒、下：アルグラス FCF128C2

### 葉のざらつき

原稿

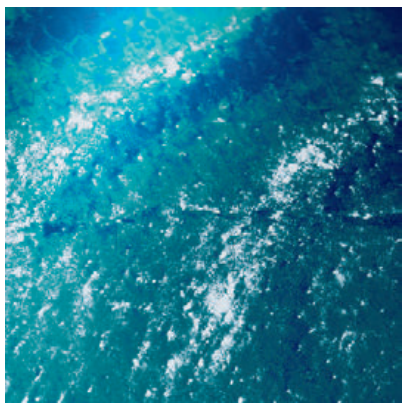
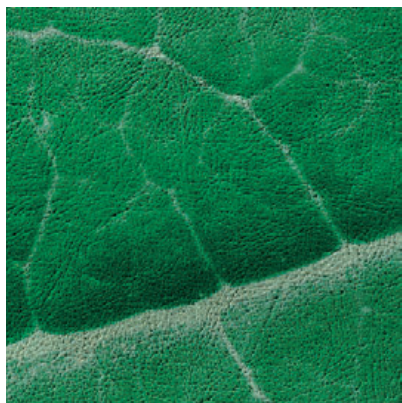
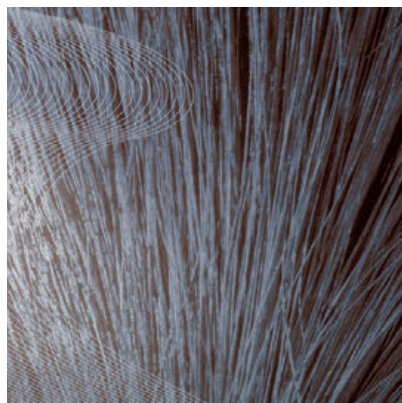
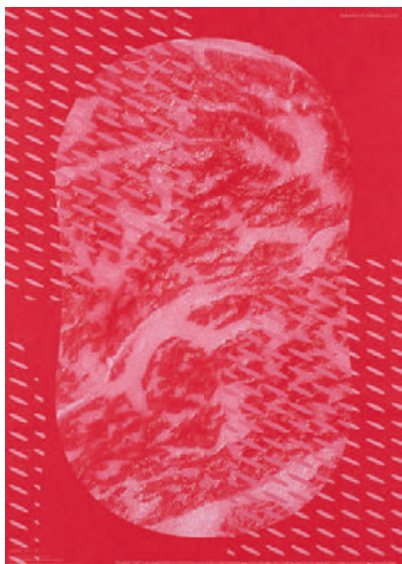


刷り順：オペークホワイト(3版)→特色緑1→特色緑2

用紙：ニューウェブロンカラー/緑

# FINISH

全作品とディテール



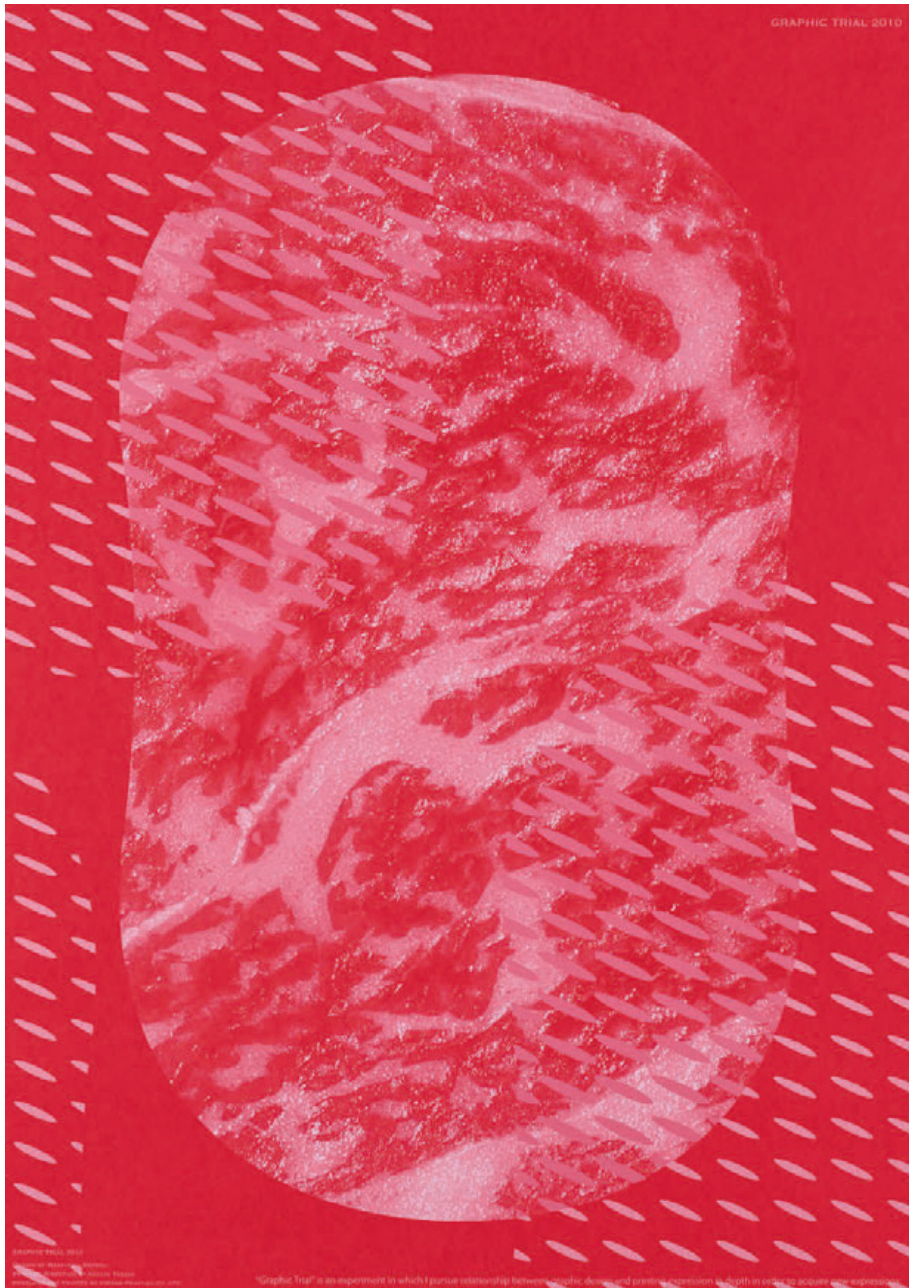
Art Direction & Design : 仲野昌晴 / Photograph : 西村 広



用紙：堅彩紙 / 黒 四六判 110kg  
版の構成：オペークホワイト (2版) → 特色オレンジ → 特色茶 → グロスメジウム → オペークホワイト  
※展示作品は仕様が異なる場合があります



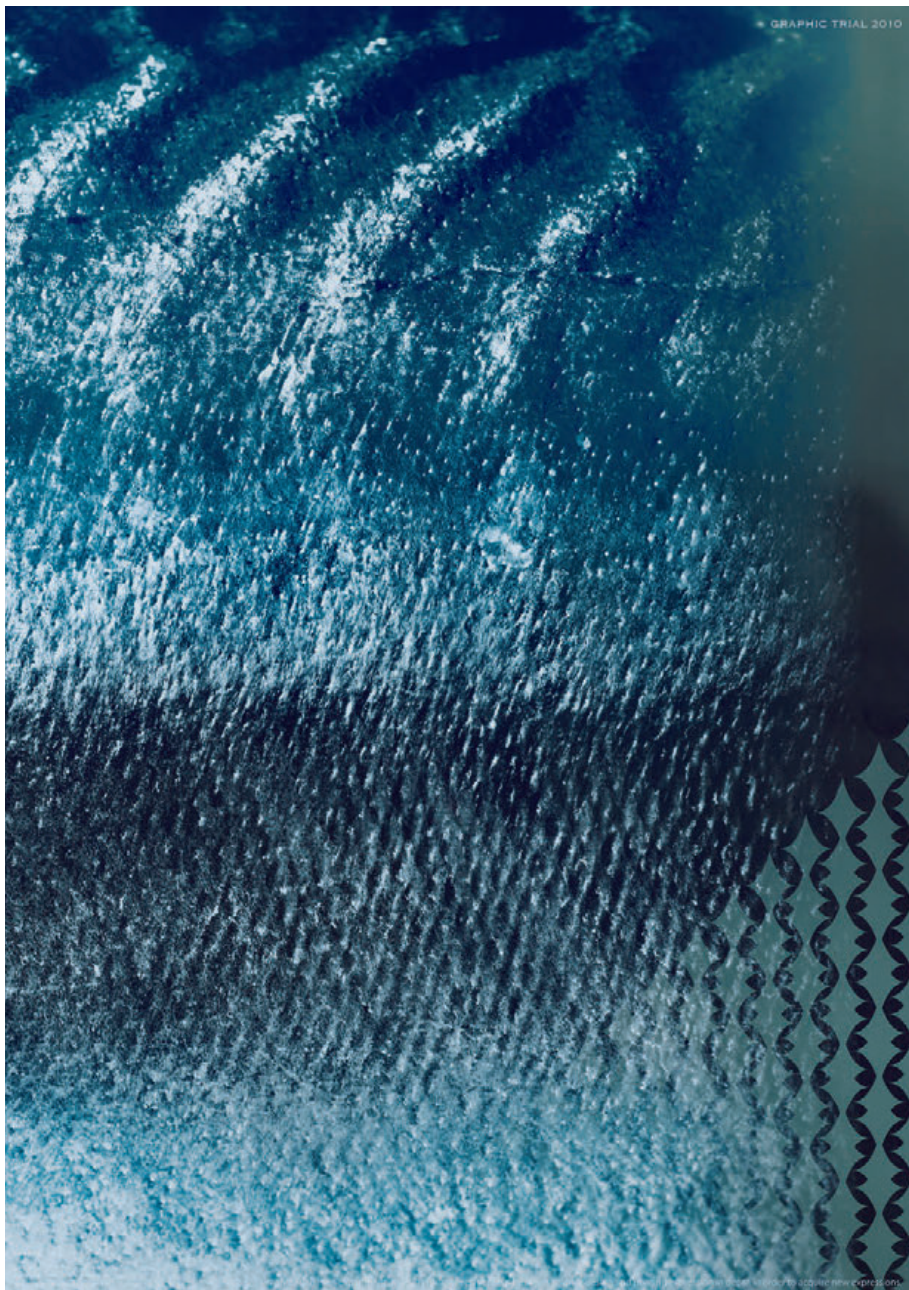
用紙：GAコットン / 白茶 四六判 86kg  
版の構成：オペークホワイト (2版) → 特色淡茶 → 特色濃茶 → オペークホワイト



用紙：TS-3 / N-52 四六判 100kg  
 版の構成：オベークホワイト (3版) → 特色赤 → グロスメジウム → オベークホワイト



用紙：ニューウェボンカラー / 緑 並口  
 版の構成：オベークホワイト (3版) → 特色緑1 → 特色緑2 → グロスメジウム (イエロー混入) → オベークホワイト  
 ※展示作品は仕様が異なる場合があります



用紙：クニメタル / No. 1104 グリーンシルバー L判 27.5kg  
 版の構成：オベークホワイト（2版）→特色青1→特色青2→マットニス→オベークホワイト  
 ※展示作品は仕様が異なる場合があります

## AFTER TRIAL

トライアルを終えて

### ●トライアルを終えて

制限を加えたことであって表現の幅が広がったように思います。簡単に言えば明暗の情報を印刷で入れるだけのシンプルな組み立てでしたが、単に明暗だからと白と暗色があればいいというわけではなく、印刷した際に紙色とどう絡むかを読むことがとても重要だと痛感しました。

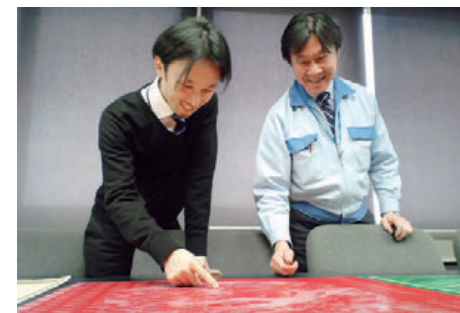
たとえば「髪」では実際に入れている色がかなり強いオレンジだったりするのですが、印刷されたものを見てもそんな派手な色があるとは思えません。でも、その色が加わったことによって本物の髪の毛のようなほのかに赤茶を感じるものに仕上がっています。想像もしなかった大胆な色をアクセントに加えることが、これほど功を奏すとは思ってもみなかった発見でした。

そもそも採用したのが超個性的な特殊紙ばかりです。印刷と用紙の組み合わせによって度々起こった予想外のことには思いきり振りまわされて、まるで「じゃじゃ馬馴らし」のようでした。しかし今になってみると、そうした想定外の要素が結果的に「雑味」となって、質感の奥行きや深みに繋がったように思います。まさに「雑味まで含めた表現」というコンセプトが、「用紙と印刷の掛け合わせによる質感表現」という手法によって実現できた感じです。一筋縄ではいかなかっただけに、改めて面白かった、と実感しています。

悪戦苦闘のトライアルでしたが、時には静かに、時には力強く僕を支えてくれたのがプリンティングディレクターの田中一也さんでした。僕の狙いに対してしっかり道筋をつけてくれたおかげで完成にこぎつけることができたのだと思います。

もしも作品を見て「触ってみたい」と思っていただけなら成功と言っていいかな、と思っています。

—— 仲野昌晴



### ●プリンティングディレクターから

難しかったのは、これらの個性ある紙を使ってどうやって写真を超えたものに仕上げるかでした。高解像度カメラで撮影した素材は、それ自体が極めて質感の再現性が高いものです。実際、平滑度の高い白い紙に印刷すれば非常に優れた質感再現が期待できるし、質感だけをテーマにしたなら、それが正解なのでしょう。でも表現方法として仲野さんが目指したのは、平滑性とも白色とも正反対の紙を使った表現です。色も質も際立った難しい紙で、しかも素材を実物よりも思いきり拡大して、よりよい質感表現をしなければなりません。

最初は版を重ねることで階調を出していこうと考えましたが、実験を重ねる中で最初のホワイト版が決め手となることがわかってきました。1版目で土台をつくり、あとは微妙な調子を補足していくという設計が一番効率的で効果的なことを発見しました。これがすべての基本となりました。

この作品では用紙の質感、風合いによるムラやザラツキが表現の一つとなっています。通常ならクレームになるような現象まで効果として積極的に取り入れようとする仲野さんの感性は、僕にはとても新鮮でした。

—— 田中一也